

箏曲家米川琴翁の音楽活動の展開

— 演奏の場の変遷を通して —

福田千絵

1. はじめに

本稿の目的は、箏曲家米川琴翁（1883-1969）の演奏会出演データを用いて、戦前から戦後にかけての演奏の場の変遷を考察することによって、米川琴翁の音楽活動の展開を明らかにすることである。また、本稿は、邦楽演奏の場の変遷の分析を、ひとりの音楽家の関わった演奏会に限定して試みる試論でもある。

本稿では、邦楽のなかでも「三曲」という音楽分野を扱うが、これは「箏曲」「地歌」「尺八」の音楽の総称である。このうち箏の音楽である「箏曲」と三味線音楽の「地歌」はひとりで両方を習得することが習わしとなっており、米川琴翁も例外ではなかった。また、地歌に箏や尺八を合奏する機会が多いために、「箏曲」「地歌」「尺八」の三者は共通のレパートリーを多数有し、いずれの分野の演奏会でも互いの楽器と演奏者が必要とされる。そのため、三者は不可分の関係であり、このことが「三曲」としてまとめて扱われる所以である。なお、地歌では三味線を「三弦」と呼ぶ習慣があり、本稿でもこれに従う。

この三曲の演奏会に関する先行研究として、明治期の三曲の演奏会を分析した野川美穂子氏の論文（野川 1991）があり、雑誌記事からのデータ抽出の方法を参照した。ただし、野川氏が紙面を割いた曲目の分析は、本稿では行わない。また、邦楽演奏会の分類は、平野健次氏が先鞭をつけ（平野 1977）、吉川英史氏も基本的にそれに依っているが（吉川 1989）、本稿では出演者の視点で新たに分類を行う。

本稿で研究対象とする米川琴翁は、大正から昭和にかけて活動した箏曲家である。岡山県で生まれ育ち、地歌三弦と箏曲を身につけ、明治末年に上京した。演奏会に出演し、教授も始めたが、結婚と同時に兵庫県姫路市へ移住、1919年に再び上京し、その後は東京で活動した。箏曲団体「研箏会」を設立し、多くの門弟に三弦と箏を教授した。100曲に及ぶ作曲のほか、演奏活動も活発で、1958年に引退後も最晩年まで演奏を続けた。米川琴翁は、江戸時代の風習から脱却しようとしていた箏曲界において、楽器改良や記譜法の考案など、新時代を牽引した人物であった。戦前から戦後にかけては、現代につながる演奏の場が確立した時期とみられる。その時期を通して第一線で活躍していた米川琴翁は、邦楽演奏の場の変遷をひとりの音楽家に限定して観察しようとするのに最適な音楽家と考えられる。

演奏・作曲・教授などのさまざまな音楽活動があるなかで、本稿では演奏、なかでも演奏会の出演に着目する。演奏には、ラジオ放送⁽¹⁾やレコード録音⁽²⁾等もあるが、集まった聴衆に直接生の演奏を聴かせる演奏会が、音楽家の活動として重要と考えるためである。その演奏会も一樣ではなく、門弟の発表の場である温習会、会派の定期演奏会、リサイタル、ほかの箏曲家や尺八家の助演、あるいは箏曲界をあげてのイベントなど多岐にわたる。箏曲家の演奏機会の多様で数の多いことは現代の箏曲

家にも当てはまるが、戦前の米川琴翁の演奏活動をみると、出演した演奏会の種類が多様であることに驚かされる。それぞれの演奏会には、会派や個人としての活動の活発化、箏曲界での位置づけなどが透けて見え、出演した演奏会の変遷が音楽活動の展開を表わしているとも考えられる。このような演奏会の種類が、箏曲家にとっての「演奏の場」であり、種類の多様化は場の広がりの意味する。「場」には、お座敷や劇場などの「場所」の意味もあるが、本稿では、どのような演奏会が演奏の機会としてあったのか、という文脈で「場」という用語を用いていく。

なお、1958年に改名するまで本名の米川親敏で活動を行っていたので、本稿でもデータの引用においては「親敏」の名を用いる。

2. 研究方法

2.1 研究資料

筆者は、邦楽雑誌の演奏会彙報等を手掛かりに足跡を検証し、米川敏子伝記（徳丸；福田 2007）に短い伝記と活動年表および作品表を掲載したが、その際に米川琴翁と研箏会の演奏会出演データを広く収集した。本稿の研究資料となる米川琴翁の演奏会出演データは、この際に収集したものを主とする。

データの収集には、おもに邦楽雑誌を用いた。とくに邦楽雑誌『三曲』（1921年7月創刊～1944年5月終刊、本稿では全号を参照。）は、演奏会プログラムが多数掲載されるなど演奏会情報が充実していた。『三曲』発刊前について尺八雑誌『都山流楽報』（本稿で参照したのは1919年～1923年。）を援用し、20点余りの該当演奏会を抽出したが、雑誌の性格上、尺八演奏会に助演で出演した場合が主となった。『三曲』以後について後継雑誌『日本音楽』（1944年7月創刊～1944年8月中断、1946年5月復刊～1954年3月終刊、本稿では全号を参照。）を利用したが、『三曲』と比較して演奏会情報が簡略で、助演についての記載が少なかった。このほか、読売新聞、米川文子伝記（吉川；双調会 1996）および巻末の谷垣内和子による年表（谷垣内 1996）、邦楽雑誌『邦楽の友』（1955年創刊）等からも数点ずつ該当演奏会を抽出した。

2.2 活動期間

考察は、米川琴翁の活動を戦前と戦後に分けて行う。

(1) 活動前期

2度目の上京から終戦まで。1919-1943年。1919年以前にも明治末年から東京で演奏を行っていたことが音楽雑誌『音楽界』などからわかるが、期間と数が少ない⁽³⁾。また、姫路滞在時の活動については、『都山流楽報』から、初代中尾都山とのロシア演奏旅行や都山流尺八演奏会に助演者として出演していたことがわかるが、米川琴翁の音楽活動全体からみると特殊である⁽⁴⁾。そのため、本稿では考察対象を2度目の上京以後に限定した。終戦前の最後の出演が確認できるのは1943年である。

(2) 活動後期

終戦から逝去まで。1946-1968年。終戦を境に社会情勢が大きく変化したので演奏会事情にも変化が生じていると予想できる。また、米川琴翁の2度目の上京後の活動全体の中間地点でもある。そこで、終戦以後を2つ目の考察グループとした。なお、1945年は演奏記録がなかった。

2.3 演奏会の種類

邦楽演奏会の種類について、平野健次氏や吉川英史氏が、「温習会形式、鑑賞会形式、コンクール形式」に分けている（平野 1977, 吉川 1989）。米川琴翁の場合、コンクールに審査員として関わることはあっても出演はしなかった。温習会形式のものは「温習会」あるいは「会派名」が演奏会の名称となっているものに限られるが、鑑賞会形式のものは名称が多様であり、演奏会の目的も一様ではない。つまり、先行研究の分類は詳細な考察には不十分であり、温習会形式と鑑賞会形式の区分に曖昧さがあることも、平野氏、吉川氏がともに指摘している。そこで本稿では、米川琴翁の演奏会への「関わり方」に着目し、以下のように3つのカテゴリー（主催、助演、参加）を設定する。そのうえで、「演奏会の種類」として、温習会、定期演奏会、名流大会など名称別に細分する。

(A) 主催

米川琴翁が主宰する研箏会が催した箏曲演奏会。定期的なものとして、温習会、研究会、定期演奏会がある。臨時的なものとして、記念演奏会、祝賀演奏会、追悼（追善）演奏会、披露演奏会、リサイタル（独演会）等がある。

(B) 助演

研箏会以外の尺八や箏曲の会派が主催し、米川琴翁が助演者として出演した演奏会。単一の会派が主催していることを条件とする。前述したように、箏曲・地歌・尺八はそれぞれ独立した音楽種目でありながら互いの楽器で合奏を行う共通のレパートリーを持つが、それらは人気曲であり、頻繁に演奏される。そのため、演奏の際には会派を超えて助演者を頼むことが日常的であり、助演者なしで成立する演奏会は少ない。また、1935年頃から地唄舞が盛んになり、舞踊会の助演も必要とされるようになった。定期演奏会、記念・祝賀等の臨時演奏会が含まれる。

(C) 参加

会派を超えた、箏曲界あるいは邦楽界全体の催しで、米川琴翁が出演した演奏会。複数の演奏家が発起人となるか、新聞社などの非演奏家が主催者となることを条件とする。音楽家の供養や祝賀のために会派を超えて集まる臨時的な催しと、協会、新聞社、国などの非演奏家の主導による名流大会や三曲演奏会などがある。

3. 演奏の場の変遷

3.1 活動前期（1919-1945）

活動前期に米川琴翁が出演したことが記録に残っている演奏会の点数は218点であった。米川琴翁の関わり方別の円グラフを図1に、演奏会の種類の関わり方別の表を表1に示す。また、年ごとの出演回数を演奏会の種類別に表した表を表2に示す。

(A) 主催

米川琴翁の主宰する研箏会が催す演奏会は、米川琴翁がこの期間に出演した演奏会の約4分の1を

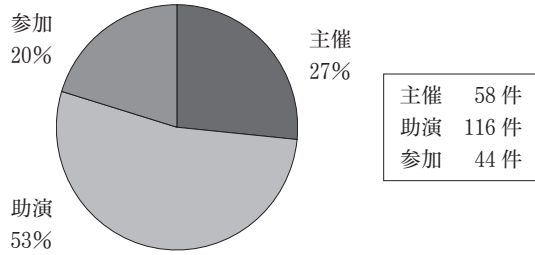


図1 活動前期の関わり方

表1 活動前期の演奏会の種類

	温習会	研究会	定期演奏会	記念演奏会	特別演奏会	祝賀演奏会	追悼演奏会	披露演奏会	送別演奏会	歓迎演奏会	新作発表会	リサイタル	舞踊会	師範会	名流大会	三曲協会	生田会	その他	合計	
主催	20	22	5	3	2	0	1	2	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	58
助演	1	0	81	7	2	3	0	2	1	1	0	2	11	4	0	0	0	0	1	116
参加	0	0	1	0	0	0	7	3	1	2	2	0	1	0	15	2	2	8	44	

(福田作成)

表2 活動前期の年代別演奏会の種類

年	演奏会の種類																	合計		
	温習会	研究会	定期演奏会	記念演奏会	特別演奏会	祝賀演奏会	追悼演奏会	披露演奏会	送別演奏会	歓迎演奏会	新作発表会	リサイタル	舞踊会	師範会	名流大会	三曲協会	生田会		その他	
1919	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
1920	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
1921	0	0	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
1922	0	0	8	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	12
1923	0	0	7	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	10
1924	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4
1925	0	0	10	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	13
1926	1	0	6	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
1927	0	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
1928	1	2	8	2	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15
1929	1	2	5	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	11
1930	2	2	4	0	0	2	1	0	1	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	15
1931	1	2	8	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	16
1932	1	2	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	8
1933	0	3	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	9
1934	3	2	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	9
1935	1	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	6
1936	1	1	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	1	0	1	0	1	1	1	9
1937	3	1	0	0	1	0	1	1	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	10
1938	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	1	0	0	0	0	6
1939	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0	0	1	6
1940	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	1	6
1941	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	1	1	0	1	1	8
1942	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	1	1	0	1	1	9
1943	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
合計	21	22	87	10	4	3	8	7	2	3	4	2	13	4	15	2	2	9	218	

(福田作成)

占めた(図1)。そのうち多くを占めたのは温習会と研究会であった(表1)。

「温習会」は、門弟が日頃の成果を披露する会で、おさらい会とも言われる。研箏会の場合、春と秋の2回、定期的に行われた。『三曲』にプログラムの掲載がなかったので詳しい内容は不明だが、数十曲が演奏され、長時間にわたったと思われる。記録に現れるのは1924年だが、会の性質上、それ以前から毎年行われていたものを、初めて雑誌に掲載したのがこの年であったのであろう。

「研究会」は、専門家を目指す門弟が古典曲を学び、披露する場と考えられる。米川琴翁は雑誌に掲載した演奏会案内を兼ねたプログラムにおいて、次のように述べている。なお、引用に際し、旧字は通用の漢字に直した。

研箏会研究会創立に就て

生田流箏曲研箏会米川社中の専門家が集ってこの研究会を創設致しました。従前から毎月あった研究会の延長で、愈よその研鑽の結果を皆さんに聴いて戴く時機となりました。(中略)

研箏会研究会同人
顧問米川親敏

「研箏会研究会第一回演奏会」プログラム(『三曲』1928年6月:69)より抜粋

研箏会では以前から非公開で小さな勉強会である月浚えが毎月行われており⁵⁾、その勉強会の公開演奏を始めたということであろう。また、この頃の箏曲は、江戸時代の作曲法による「古典曲」と、西洋音楽の影響が見受けられる明治末年以降の「新曲」の両方が演奏されていた。研箏会では、古典曲に加え、米川琴翁作曲の新曲が演奏されていたが、当初の研究会では古典曲の研鑽が重視されていたようである。第1回研究会は1928年6月に開催され、その後1937年4月までほぼ毎年2回ずつ開かれたが、1941年には「研箏会親弦部」という新たな名称で開催されるようになった。親弦部演奏会では新曲も舞踊をとまなう曲も演奏された。

そのほか、主催演奏会として、「定期演奏会」があった。第1回定期演奏会は1922年4月に当時の音楽のメッカであった東京音楽学校奏楽堂で行われた(図版1)。研箏会会員は総出演し、在京の著名な箏曲家、尺八家が助演者として参加した。プログラムをみると、全12曲のうち、冒頭の3曲と6

明治松竹梅	八重衣	霜夜(都山流本曲)	三の景色	砧	千鳥の曲	山の雨	若菜	下總曲(三絃本手)	海雀	山鳥の聲	童謡	梅の宿
三	三	加藤	天笠	三	三	三	三	三	三	三	三	三
尺三	楯久	倉川	倉山	宮本	赤木	赤木	加藤	米川	米川	白井	白井	米川
津有	春山	蕭山	貞子	貞敏	綾子	綾子	柔子	親敏	親敏	外二名	外八名	親敏
田維	尺	尺	伴	伴	尺	尺	尺	三	三	外二名	外八名	外八名
山代	荒木	荒木	橋久	橋久	津田	高橋	高橋	加藤	田中	久保	久保	米川
外九	古	古	春山	春山	雨篁	宏春	宏春	柔子	柔子	外六名	外六名	外十名
名	童敏	童敏	山	山	篁	山	山	子	子	外六名	外六名	子

○研箏會
日時 四月二日(日曜)午後一時開會
會場 上野 東京音楽学校奏楽堂
主催 米川親敏
第一回演奏會曲目

図版1 第1回研箏会定期演奏会プログラム(『三曲』1922年3月:47-48)

曲目の《山の雨》が会員のみ演奏、8曲目の《砧》と終曲の《明治松竹梅》は会員の演奏に専門家が加わったものであった。それ以外は、加藤柔子、田中韶、楯久春山、天笠才寿という箏曲家、倉川簫山、津田維山という尺八家とその社中の助演を得て、助演者のみ、あるいは助演者と米川琴翁（プログラムでは本名の「米川親敏」）との共演で占められていた。

定期演奏会は、会派をあげての演奏会である点で、温習会と類似の性格を持つが、会場と助演、番組などの点から、短時間で会派のエッセンスを聴かせようとする意図がみられる。

定期演奏会はその後ほぼ毎年開催され、1927年12月の第5回以降は、舞踊をともなう曲がかならず含まれていた。また、1928年11月の「御大典奉祝研箏会大演奏会」を始めとして、しばしば「記念演奏会」「特別演奏会」と臨時的に名称を変えた。1929年10月の「研箏会十周年記念大演奏会」は、箏曲の演奏会としては初めて、舞台、客席ともに広い歌舞伎座で開かれ、『三曲』誌上でも注目された⁽⁶⁾。

ほかに、次女力枝（1916-1934）の急死に伴う1935年5月の「追悼演奏会」、1936年には、長男親利（1920-1981）と長女敏子（1913-2005）の独立名披露の演奏会が帝国ホテル芸芸場で盛大に開かれた⁽⁷⁾。1941年6月と翌年には、米川琴翁の新曲を発表する場である「新作発表会」、1942年6月の「研箏会箏弦舞踊発表会」があった。

以上のように、主催演奏会は、定期演奏会と温習会を主軸とし、研究会、新作発表会、舞踊会などの演奏の場の広がりが見られた。

（B） 助 演

米川琴翁が活動前期に出演した演奏会の約半数が助演であった（図1）。そのうち、定期演奏会が多くを占め、その次に舞踊会であった（表1）。

「定期演奏会」の多くは尺八の各会派の演奏会であった。本稿の調査資料に都山流尺八の雑誌を使用しているため、『三曲』発刊以前の1921年まで、つまり活動前期の最初の2年間は都山流に偏っているが、その後は琴古流にも多数出演しており、表2で明らかのように『都山流楽報』を用いていない1924年以降にも定期演奏会が多数あり、このうちのほとんどが尺八演奏会であった。助演者として出演した会派の数は20にのぼる。ただし、定期演奏会に含めていても、記録上は会派名のみで温習会の可能性があるものや、「都下学生尺八演奏大会」のように学生のおさらい会のようなものも含まれている。ほかに箏曲の会派もいくつかあるが、これは、加藤柔子や楯久春山など親しい箏曲家の会に限られていた。

「舞踊会」は、箏三弦の音楽で舞う地唄舞の会である。地唄舞は、1935年に米川琴翁の妹で双調会家元の初代米川文字が地唄舞研究会を発足させたのが始まりとされ、同年に開催された三曲舞踊大会には米川琴翁も出演した。その後6年間に、「地唄舞研究会」「舞踊新作発表会」等に出演、舞踊協会の名古屋公演に同行するなど、さまざまな舞踊の催しに関わった。

表1の「助演」の欄において、そのほかの記念演奏会や特別演奏会、リサイタル、師範会などはすべて尺八演奏会である。

以上のように、米川琴翁が交流のある尺八家の演奏会に頻繁に出演し、舞踊会にも出演した。ただし、長女の敏子が1929年3月女学校を卒業した後は、敏子の演奏・作曲活動が活発になり、それまで米川琴翁が出演していた尺八演奏会に敏子が出演するようになり、米川琴翁の助演は減少した。これは、表2の「定期演奏会」出演が、1935年以降は年1回程度であることにも表れている。

(C) 参加

参加型演奏会は、約4分の1を占めるが(図1)、内容的に、臨時的な演奏会と、非演奏家主催の演奏会とに二分できるので、順に述べていくことにする。

臨時的な演奏会として、追悼演奏会が多かった(表1)。これには長谷光輝師追善演奏会(1922年)や、箏曲の祖である八橋検校二百五十年追悼会(1934年)など、多くの音楽家に影響を与えた人物のための集いが含まれる。ほかに、引退披露、還暦や喜寿の祝賀などがあった。歓迎演奏会には、1919年の米川琴翁の上京を歓迎する会もあった。

一方、非演奏家主催の演奏会で多かったのは、名流大会であった。「名流大会」の第1回は、『三曲』を発行していた美妙社の主催で1924年11月に邦楽座で開かれた(図版2)。この時は、前年の関東大震災の復興を掲げ、『三曲』主宰の藤田鈴朗が奔走し、すべてのマネージメントを行って開催した。この名流大会は、プログラムの全曲を各会派の代表同士が組んで演奏するという、聴きごたえのある内容であり、同時に、非演奏家が客観的な立場で企画と人選を行う演奏会として初の試みであった。米川琴翁は、この記念すべき第1回演奏会で、古典曲《玉の台》を旧知の間柄の加藤柔子の三弦と津田雨篁の尺八と共演し、箏を演奏した。演奏会は大成功をおさめたようである⁹⁾。しかし、翌年の第2回は不調に終わり、藤田は名流大会から手を引く。その後、新聞社が主催となり、1943年まで継続した。

そのほか、超会派の演奏会として、生田流箏曲の家元の集まりである生田会¹⁰⁾の第1回演奏会(1936年)、1940年6月に結成された大日本三曲協会の演奏会(1941年)があった。また、表1および表2では「その他」に含めているが、国の主導で開かれた邦楽芸能大会に2回(1940年と41年)出演した。

参加型演奏会については、追悼や祝賀等の臨時的な演奏会が盛んで、演奏家同士の交流が親密であ

豫告 三曲名流大会

四三二 圓圓半圓	會 費	邦丸 樂之内 座	會 場	午三十一 二一 時日月	日 時
(者 演 出 ニ 並 目 曲)					
松 殘 那 八	鹿	玉 乙 甲 雪 木	四		
竹 須 重	の遠音	春	季		
梅 月 野 衣	(本曲)	のモス	の曲		
	憩	臺 調 ス	(奥組)		
胡三箏 弓絃	三尺三同箏 絃八絃	三尺三同箏 絃八絃	尺三箏 八絃	尺箏 八	尺三 八絃
山上今 室原井 千真 代佐	富荒 崎木	高越萩 橋野岡	井川木 村瀬	山川 口瀬	津加米 田藤川
	慶春古	榮榮松	豐里 惠	四順	雨柔親 晴道
子喜松	昇童	清松韻	子子子	郎輔	篁子敏 風雄
					童武 山子
					應美

図版2 第1回三曲名流大会プログラムの部分『三曲』1924年11月：51より

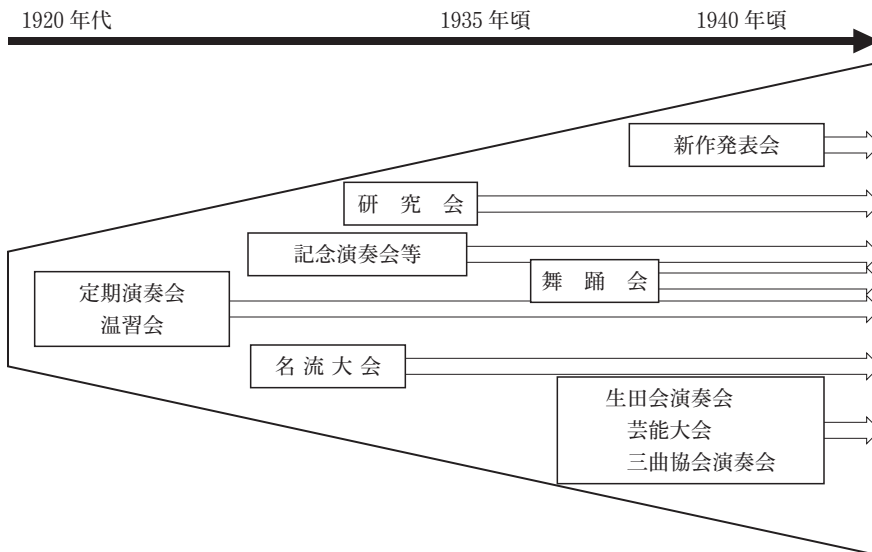


図2 米川琴翁の戦前の演奏の場の広がり

ることがうかがえる。一方、非演奏家の主導による演奏会は、1924年の名流大会が先駆けで、その後、1940年前後に、多種の演奏会が新聞社や国などの主催で行われた。これには戦時の特殊性もあると思われるが、米川琴翁ら音楽家にとっては新しい活動の場であったともいえる。

以上のように、活動前期には、追悼、祝賀、歓迎、送別など節目にさまざまな演奏会が開かれ、出演した演奏会の種類は多岐にわたった。そして、助演が多く、1935年頃から新機軸が打ち出された。新機軸とは、1924年に名流大会が始まったこと、1928年に研究会が始まり、これが1941年に名称を変えて続けられたこと、1935年からは舞踊会、1936年には生田会演奏会、1940年からは新作発表会、芸能大会、1941年からは三曲協会演奏会が始まったことである。活動前期の演奏の場の広がりを図2にまとめた。

活動前期は総じて出演回数も多かった。年によって2回から16回とばらつきがあるが、平均して約9回であった(表2)。

なお、終戦前の最後の出演が確認できるのは1943年5月の温習会である。この後、年末の三曲協会演奏会にも出演した可能性があるが確認できなかった。実質の演奏活動は、1943年5月におさらい会の自粛、1943年9月より「おさらい会禁止 演奏会は許可制」となり、1944年2月に「公開演奏会等は今後一年間休止」とされるので、それまでとなる。制限される間際まで演奏活動を行っていたことがわかる。

3.2 活動後期(1945-1969)

米川琴翁が出演した演奏会の点数は109点。米川琴翁の関わり方別の円グラフを下に、演奏会の種類を関わり方別の表を表3に示す。また、年ごとの出演回数を演奏会の種類別に表した表を表4に示す。

(A) 主催

活動後期の主催演奏会は全体の約3分の1であった(図2)。種類としては、温習会が大半を占めた

箏曲家米川琴翁の音楽活動の展開

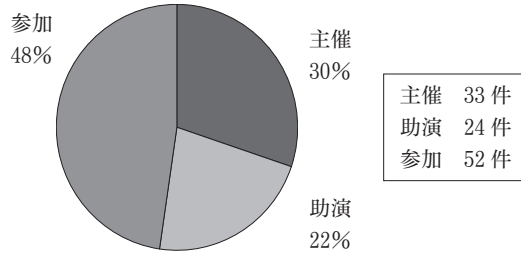


図3 活動後期の関わり方

表4 活動後期の年代別演奏会の種類

	温習会	親子会	研究会	記念演奏会	祝賀演奏会	追悼演奏会	披露演奏会	名流大会	三曲協会	生田流協会	リサイタル	その他	合計
主催	25	2	1	3	0	0	1	0	0	0	1	0	33
助演	2	0	0	3	7	9	2	0	0	0	0	1	24
参加	0	0	0	0	1	1	0	19	15	10	0	6	52

(福田作成)

表4 活動後期の年代別演奏会の種類

	演奏会の種類											合計	
	温習会	研究会	記念演奏会	祝賀演奏会	追悼演奏会	披露演奏会	名流大会	三曲協会	生田流協会	リサイタル	その他		
年 1946	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2
1947	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2
1948	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
1949	0	0	1	0	0	0	1	1	1	0	0	0	3
1950	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	3
1951	0	0	1	2	0	0	1	1	1	0	0	1	6
1952	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	2
1953	2	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	1	6
1954	2	0	0	1	1	0	1	1	1	0	0	0	6
1955	1	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	1	5
1956	2	0	0	2	1	0	1	0	0	0	0	0	6
1957	2	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	5
1958	1	0	0	0	2	1	1	1	1	0	0	0	6
1959	2	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	5
1960	1	0	1	0	1	0	1	1	1	1	0	1	7
1961	2	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	5
1962	2	1	0	0	1	0	1	0	1	1	1	0	7
1963	1	0	1	0	0	0	0	2	1	1	0	0	5
1964	2	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	5
1965	2	0	0	1	0	1	1	1	1	1	0	0	7
1966	1	0	1	0	0	0	1	0	1	1	0	0	4
1967	2	0	0	1	0	0	1	0	1	1	0	0	5
1968	2	0	0	0	1	0	1	0	1	1	0	1	6
合計	29	1	6	8	10	3	19	15	10	1	7	109	

(福田作成)

(表3)。ただし、活動前期にあった定期演奏会がなくなった。活動前期においては、「研箏会温習会」あるいは「研箏会演奏会」という名称で行われていたが、活動後期になると、「研箏会」とだけ記されるようになった。そのため、温習会か演奏会か不明だが、現代ではこのように会派名だけの場合、温習会が普通であるので、本稿でも温習会とした。また、1953年から2年続けて行われた「親子巴会」も、米川琴翁と長女の敏子、長男の親利との共同の温習会とみなした。温習会は春と秋の2回行われた。演奏会記録だけでは判断材料が不十分なので、温習会と定期演奏会の関係については、今後の課題としたい。

活動前期に定期的に開かれていた研究会は、1962年に「親利会」として唯一みられる。これは、長男の親利が中心となって開催したものであろう。本稿の範囲ではないが、この後、1968年12月から「九曜会」という名称で研箏会研究会が毎年開催されるようになる。米川琴翁の亡くなる直前に始まったこの研究会は、当時家元を継承していた親利が主導したものであった。

そのほか、晩年の1962年にリサイタルを開催、そのほか、家元継承披露演奏会(1958年)や米川琴翁の喜寿を祝う記念演奏会(1960年)などがあった。

以上のように、活動後期の主催演奏会は、温習会を中心とし、節目において盛大に演奏会を行うというパターンであった。

(B) 助 演

活動後期は、助演が約5分の1に減少していた(図2)。この理由は2つ考えられる。ひとつは、資料の演奏会情報に助演者名が記されていない場合があること、もうひとつは、1930年代から、長女の敏子が琴翁に代わって助演を務める機会が増えたことである。また、米川琴翁は1958年に引退したが、その後も長い間音楽活動を共にしてきた演奏家の追悼や祝賀演奏会には出演した(表3)。

(C) 参 加

活動後期では、参加型演奏会が増え、全体の約半数を占めた(図2)。種類は、臨時的な演奏会が少なく、非演奏家による演奏会が多かった(表3)。

名流大会は、戦前は各会派の代表者のみが出演していたが、戦後は会派の会員が大勢で出演するスタイルに変わった。非演奏家の演奏会については、ほかに三曲協会演奏会と生田流協会演奏会がある。三曲協会は戦前の大日本三曲協会が改称したもの、生田流協会は戦前の生田会が復活・拡大したものである。三曲協会演奏会も生田流協会演奏会も各会派の会員が大勢で演奏が1曲ずつ演奏するスタイルである。米川琴翁は、この3種の超会派の演奏会に研箏会として毎年参加した。

以上のように、活動後期では、助演は極端に減り、温習会と非演奏家による超会派の3種の演奏会を主軸とし、年によって追悼や祝賀の臨時的な演奏会が加わるものであった。演奏会数は、年1回から7回、平均して約5回であり、活動前期より少なかった(表4)。

4. 演奏の場の役割と音楽活動の展開

これまでの考察結果から、米川琴翁の活動は次のようにまとめられる。活動前期に出演した演奏会の種類は、追悼、祝賀、歓迎、送別など多岐にわたり、助演が多く、1935年頃から舞踊会、生田会、芸能大会など新しい活動の場が広がった。一方、活動後期は温習会と非演奏家による超会派の演奏会

を主軸とし、年によって追悼や祝賀の臨時的な演奏会が加わるものであった。

このような演奏の場の変遷は、米川琴翁の音楽活動にどのような意味を持つといえるだろうか。場の役割を分析しながら音楽活動の展開を考察していく。

- 1) まず、「主催」演奏会である温習会と定期演奏会は、会員の発表の場であり、会派の基本的な営みといえる。
- 2) その一方で、個人的な音楽活動として、ほかの会派の演奏会に出張する「助演」があり、これは頻繁に行うことで、個人の演奏家としての位置が確立される。助演の依頼が増えるということは、周囲の演奏家がその実力を認めたことに他ならないからである。
- 3) 活動前期では、個人の活動である助演に加え、しだいに研究会や新作発表会など演奏会の種類が増え、会派の活動がより活発になった。
- 4) このような会派と個人の活動が両輪となって、三曲界で活動する会派およびそれを率いる家元として認められたのであろう。名流大会のような「参加」型演奏会の出演が増えていった。活動前期の終わりは戦時と重なり、国の主導で演奏家を集める催しが毎年開催されたが、それにも会派の代表として参加した。助演が一主催者の依頼で出演できるのに対して、参加型の演奏会は、組織や複数の演奏家から音楽界の重要な一員として認められて初めて演奏の機会が与えられる。すなわち演奏の場の広がりや米川琴翁の音楽家としての斯界における地位の確立に寄与し、最終的に参加型の演奏会への出演がその地位の象徴となったと考えられる。
- 5) 戦後の参加型の演奏会は、各会派の代表が戦前の三曲界で確立した地位を受け継ぎ、会派ごとに大勢が演奏し、会派が三曲界の一員であることを示す祭典的な場となった。この時期になると、米川琴翁は活動を発展させるのではなく後継者にバトンを渡し、自らは引退して限られた演奏会にのみ出演するようになった。

以上をまとめると、米川琴翁の場合、1920年代から会派と個人の音楽活動の基盤を作り、1935年頃からは演奏会の種類を多様化して活動を発展させて地位を確立した。戦後は長女と長男に道を譲り、戦前の活動で獲得した三曲界での地位を象徴する演奏会に出演するという道をたどったといえる。このような活動の展開は、ほかの箏曲家にもあてはまるひとつのモデルとなるかもしれない。

5. おわりに

本稿は、米川琴翁の演奏会出演データを用いて、演奏の場の変遷を考察することによって、米川琴翁の音楽活動の展開を明らかにすることが目的であった。また、本稿は、邦楽演奏の場の変遷の分析を、ひとりの音楽家の関わった演奏会に限定して試みる試論でもあった。

出演した演奏会の役割を考察することを通して、ひとりの箏曲家の音楽活動の発展と、後進に道を開いていった軌跡をたどることができた。関わり方による分類も、音楽家の活動の分析には有効であった。

その一方で、本稿の考察を通して、演奏会データを扱う注意点が浮き彫りになった。そもそも掲載されていない演奏会があり、掲載されていても曲目と出演者が省略されている場合もあり、演奏会情報は均一ではない。そのような制約のなかで、主に演奏会名と主催者を手掛かりに分類を行った。また、本稿ではひとりの音楽家の活動に焦点を当てたので戦時の特殊性には最低限しか触れなかった。今後は、個人の出演に限定せず広く演奏会データを収集する予定であるが、その際には、演奏される空間である会場の特色、曲目、出演者、時代背景等にも配慮し、演奏会の種類についてより緻密な分

類と分析を行い、邦楽演奏の場の役割について考察を深めたい。また、本稿で扱った出演データは327点にのぼったが、実際には記録に表れない部分でもっと多数の出演があったのではないかと思われる。今後も資料の発掘に努め、補っていきたい。

*本研究は、平成23-26年度科研費(若手研究(b)) [研究課題番号:23720075] の助成による研究成果の一部である。

《注》

- (1) ラジオ放送は、NHKの前身であるJOAKが1925年3月22日に放送を始めた。米川琴翁は4月21日に初出演し、自作の《三日月》と《潮の響》を弟子とともに演奏した。
- (2) 確認できたもっとも初期のレコード録音は、1918年にニッポノホンから発売された初代中尾都山との共演による《夜々の星》である(徳丸;福田2007:20)。
- (3) 1910年から1911年にかけて、生田流琴弦研究会2回、邦楽演奏会2回、(以上東京音楽学校奏楽堂)、明治音楽会1回(日本青年館)の出演が確認できている。
- (4) 尺八家初代中尾都山に同行し、1915年に3カ月に及ぶロシア演奏旅行、1916年に数日間の中国地方への旅行を行ったほか、1914年から1919年にかけて米川琴翁の温習会、都山流尺八演奏会への出演等、確認できているものだけで12回の演奏があった。
- (5) 米川琴翁の高弟で、独立して白菊会を主宰している佐藤親貴(1914年生)の談話による。インタビューは2004年7月。
- (6) 歌舞伎座の出演について、藤田鈴朗は次のように述べている。「今秋の異彩は先ず宮城道雄氏の八十弦と作曲の発表会、中能島欣一氏の作曲発表会、米川親敏氏の研箏会が一夜三千円の歌舞伎座へ進出した事、其他新たに興った会 各定期の会など皆出揃った賑やかさは先ず以て、三曲界の陣頭第一線は実に華々しく旺盛を示しております(藤田1929a:79)」この頃の会場使用料は、公立の日比谷公会堂が300円、保険会社の講堂である仁寿講堂など500席余りの小規模な会場が100円であった。
- (7) 米川琴翁には三男二女がおり、長男の親利(本名恭男)が研箏会二代家元、長女の敏子が三代家元となった。
- (8) 主催した藤田鈴朗は、直後の手記において、「容易ならぬ名流諸士の顔寄せ」が当初の計画通りに万事滞りなく進行し、客席も満席であったことを報告している(藤田1924)。
- (9) 生田会は1933年に結成された。定期的に会員の自宅に集い、国文学者の藤田徳太郎を招いて詞章についての講演を聴くなどした。初期のメンバーは生田流箏曲の主な会派の家元9名で、年齢順に、川瀬里子、加藤柔子、富崎春昇、木谷寿恵、米川親敏(琴翁)、福田喜久子(栄香)、天笠才寿、宮城道雄、中島雅楽之都。

引用文献

- 吉川英史, 1989, 「演奏会」 *in* 平野健次; 上参郷祐康; 蒲生郷昭(監修) 『日本音楽大事典』 東京: 平凡社, 179-182.
- 吉川英史; 双調会(編), 1996, 『米川文字 人と芸』 東京: 双調会.
- 谷垣内和子(編), 1996, 「年譜」 *in* 吉川英史; 双調会(編) 『米川文字 人と芸』 東京: 双調会, 302-412.
- 徳丸吉彦; 福田千絵, 2007, 『完全なる音楽家 — 初代・米川敏子の音楽と生涯』 東京: 出版芸術社.
- 野川美穂子, 1991, 「明治期の三曲の演奏会について — 『音楽雑誌』 掲載記事を中心に —」 『東京芸術大学音楽学部紀要』 第17集: 45-84.
- 平野健次, 1977, 「邦楽演奏会の戦前と戦後」 『季刊邦楽』 12号: 79-82.
- 藤田鈴朗, 1924, 「三曲名流大会後記」 『三曲』 12月号: 54.
- 藤田鈴朗, 1929a, 「演奏会場の紹介」 『三曲』 11月号: 72.
- 藤田鈴朗, 1929b, 「鈴朗雑記」 『三曲』 11月号: 79.